

常山紀談

十七

函番號	2 / 號
種別	國
種別	39,30 號
購入日	月 日

919.5  
338  
Vol. 17



常山紀談卷之十七目次

- 一 真田昌幸サナタ、父ニ子ニ三人始末シメツの事
- 一 西村孫之進ニシムラ武功ブコウの事
- 一 佃次郎ツク兵衛イヨノ伊豫國松前城ニツチキを守る事
- 一 大久保忠佐オホクホ佐ホ三枚橋城ササイハシを賜タマひる事





常山紀談卷之十七

備前國 湯浅新兵衛元復輯録

○真田安房守昌幸ハ海野小太郎幸氏二十代の末なり父海野  
 彈正幸隆信州真田ニ居ル真田氏と称ス武田家の臣とス  
 嫡子源太左衛門信綱ハ長篠ニ討死ス二男武藤喜兵衛昌幸  
 と云長篠の後高坂彈正五ヶ條の諫をトケル其一条ゆく昌幸  
 ノ兄れ家をつげせらるり父れ幸隆後一徳齋と号シ昌幸  
 信玄の近習少く十八の歳川中嶋ニ鎗を合せり天正十年  
 勝頼諏訪陣一四方より敵来り耐昌幸五口妻の城ニこのれ  
 よとソのくまてり長坂長閑其謀を用ひて勝頼郡内ニ封じりて  
 死して國亡ひぬ北条氏政兵を知りて甲府を攻取んとすとき



昌幸徳川家ニ属シ依田信蕃と碓日嶺ニ陣シて北条の粮道  
を塞ク 東照宮北条と和平シヨリ上野の沼田を以テ甲斐  
の都留信州佐久二郡ニ換ラベト約アリ是ヨリ前昌幸沼  
田此城を攻取テ要害の地トセリ真田ニ上田を與ヘ沼田をば  
氏政ニ渡シベキヨリ仰出サス上田ハハレトウリ信玄以来真田ニ居  
所アリ昌幸トモ徳川家ニ功有トイヘトモ僅小上田と沼田を賜ハ  
ズぬ賞甚薄トト思ヒテ辞シテクハ沼田ハ賜リテ地ニ非ズ  
吾鋒ヲ取テ得ルニバ故ナク人ニある人ニ事叶ヒル事ト  
トクリ豊臣家ニ属スベキヨリを云送テ其折クモ吾  
東照宮の上京ある事を怒ク此を悦ビ密ニ上杉景勝ニ真田  
ノ力を合せヨリ下知セられルベク六百の兵を真田ニ許シ援

トク 東照宮真田ハ奸謀ある者なりトモヨリ憎セられ  
上無禮の答を怒ラセヨリ大久保七郎右衛門忠世鳥居彦右衛  
元忠平岩七之介親吉柴田七九郎康忠を將トシテ七千の兵を以  
テ上田を攻マセヨリ昌幸城ヨリ一里計隔ルカ加賀川を敵渡ル  
時半途をおベトトおもひテ小甲州の浪人板垣修理吉ヨリ敵  
の半渡を付ク利有トト三遠の物師トモあれば敵の後陣ニのミ  
北勝ハハレト云ケレバ昌幸尤ありトモ城ニ近キ砥石此城ノ痛  
子信之矢津の砦ニ矢津但馬を止めテ寄手必漆屋平ヨリ寄ベ  
トトおもヒテ受ケテ不意ニ突ク知んトの謀あり又城外小野  
山のウケ小郷民を伏置テ寄手サレミク町口ニ押入惣郎の内  
横小路ニ柵をくハ違ヒヨリゆるゆる簾をうけ其蔭ニ伏兵を置



鉄炮テツポウを打かぐる昌幸シヤウキョウ思ふ事オモヒコト不引受城門フキウケシヤウシヤウシヤウ三方より一同イツドウ打く  
出デしシまマバ寄ヨセテまマ支サへ兼カネく崩クズしシるルバ射シるル老多オホタ一砥石トイシ矢津ヤツより  
も切キくクかり郷民ガウミンもも合ヒしシるル大久保オホクボ十四五騎シヨウゴキ少シて踏止フミトメり  
戦シひヒくク加賀川カガハまで引取ヒキりリ鳥居トリキハ高タカきキらラを退ヒキきキらラを砥石トイシ  
の兵ケヒ喰クヒ苗人メノトメとく慕シタひヒまマまマバ五六町アヘカ計ケの間ノは討ウチもモ老数オホタ多タかり  
大久保オホクボハ鳥居トリキが敗軍ハイクを見ミく忠世タビヨ唯一タビ騎キ引ヒきキて第平フナヒ忠孝タカカ彦ヒコ  
門カド思オモはハ物具モノグは銀ギンの揚羽アゲハ比蝶ヒテフのさサしシ抱アまマを兼イリ付ツケく馬ウマより飛トビ  
下シタア鎗ヤリを提サゲく扣ヒカへヘ小敵オシカ押オシ寄カるル中ナカも真先マツサキあるアル兵ヘイを突ツク  
伏カせセりリ忠世タビヨが返マゼさサをヲ見ミて松平マツダヒラ七郎シロウ右衛門ウヱモンをヲもモ引ヒきキ  
来キまマりリ平ヘイ々タタハ小コ々タタまマるルよヨふフこコろロ久キウ保ホ真田マコトも進スみミ得エ得エ  
其間アヒタス僅カ十間ケン計ケよヨるルがガれレども忠世タビヨ少シもモひヒるルまマじジ日置ヒキ五右衛門ウヱモン忠

世ヨが陣ザンの前ノをヲ通トらラんンとト平ヘイ々タタをヲ敵トクよヨ三ミッツ走シをヲ付ツきキるルそ  
と云イ々タタるルよヨ日置ヒキいイをヲあアやヤりリんン味方ミカタぞゾと心得ココロエく日置ヒキ五右衛門ウヱモン  
たタのりノリと名ナをヲくク通トるルをヲ足立善一郎アサダタニシチウ政定セイテイ鎗ヤリおオつツるル鞍クの前ノ輪ワ  
を突ツク五右衛門ウヱモンが後者シウシヤ鎗ヤリを取直トリナホしシ菅ツク郎ロウを突ツク平ヘイ々タタが前ノをヲせ  
通トらラんンとト平ヘイ々タタをヲつツきキらラれレども従者シウシヤ鎗ヤリを拵ソロへヘく平ヘイ々タタ  
向カふフ其間アヒタは五右衛門ウヱモン兼カネ拔ヒキしシ越ワを氣多ケタ甚シ六郎ロウのノごゴとト追オいイ  
まマ小股コウカのノまマづズを突ツク其時キトキ五右衛門ウヱモンあり顧カりリ川中島カハナカシマの加勢カセと  
思オモひヒく危キふフくクしシとトいイひヒくクかカけケ接スりリ忠世タビヨ平山ヘイサン岩イハ分陣フンジンは往ユキて  
敵トクハまマづズ追オいイ来キまマりリ我跡ワカアトを詰ツらラまマるル切キくクかりリいイし  
とトいイくクも親オホ古敵コヒ小勢コセたタまマもモ必ヒ定テイ近所キンシヨは伏兵フクヘイ有アりリとト進ス  
まマじジ其間アヒタは昌幸シヤウキョウ城シヤウを引入ヒキりリ此日ココノヒ酒井サカ與ヨ九郎ク殿ノへヘとト敵トクは



信仍或本三  
訓ス何カ  
曼ナク架

首を取多きバ其日の一此功名なり羽立日忠世康忠真田が枝城丸  
子を攻んと筑磨を川を渡ると真田見く海野町へお出りハ  
重原を一騎お小相働く忠世鳥居平岩は後を詰バ敵の中を取  
切討懸一とひと同心せバ真田引取り味方ハ八重原陣  
真田も城を出く陣一足輕軍あり芝土居をつれ柵を結対田  
働き小回を送るかか濱松より井伊直政大須賀康高を始  
ととと五千餘援兵とりさきども秀吉の下知より景勝大  
軍あくと上田の後巻するとのぞえを諸將相謀り陣拂を昌  
幸が次男左衛門佐信仍はけ慕んと大返しふかへり軍を  
へき物色を昌幸足く信仍を制して追ざり諸將歸陣の後  
昌幸大息ついく 徳川殿ハ誠の英雄あり加勢を以て城を攻

るををあしきしき昌幸其謀に陥り防ごめを心あつて  
夜討乾けの志夢も無あり斯きをせり不意に  
取こる事吾計の及ぶべきにあべと云たり其後 東照宮  
太閤と和平なりは景勝の加勢に頼もたなく信州甲州  
の人々を真田頼とて秀吉よて徳川家へ歸り属せよと旨を  
申せば御許容あり天正十五年正月七日昌幸信州深志北  
小笠原右近大夫真幸とて駿府よりありて 東照宮口小謁  
奉る

東照宮も昌幸が武勇侮でござると思はれく嫡子信之を本  
多忠勝が婿小せんと仰らるり小昌幸夫ハゆめあやうらたのり  
ん本多が女を信之が妻とせん更さるる屋を小はるる



東照宮此事を太閤は御物語有し小忠勝が女を養うて今  
ハコが女なりといひせしむるもさうしれしべ 東照宮使  
を以て志願しと仰送らるる果して昌幸が受くると云  
斯く北条征伐の事起まり天正十六年八月北条氏政の使と  
て小條氏規聚樂は系氏政上京まじりとりへども上野の沼田と  
天正十年徳川殿と和平の時相渡さるべしを真田次忠ある事を  
申て小條家志を失ひゆ平く安房守は彼地を小條は渡せしむ  
旨を志願しと云ふ氏政上京せんとも申する秀吉は往年  
の事審み知ざる事なり北條家は土地の事能知る若を上京  
せしめよと云ふ氏規は暇ありぬ翌年坂部岡越中融成入道  
江雪大坂は赴きり秀吉事のものにすまひ真田が上州

の内北所領三分二并沼田の城を北條は渡し其換地は徳川家  
より真田は與へらるる所三分一名胡桃城とも真田已前の如  
く領すべきよし江雪は命せられりかくし真田が方より沼  
田を武州鉢形に北條氏邦は渡し氏邦其従士猪俣能登直  
を沼田の城代とせしふみある人あり得失の辨あり名胡桃の城  
は真田が領せし事を怒りききり城を奪ひ取ると昌幸  
太閤は訟へらば太閤は小條は沼田を得ば上京すべきと約し  
るが遅緩を怒らるるよし此事をすく氏政を征伐せんと  
志決し天正十八年秀吉師をゆき小田原に打向はる東山  
道の先陣前田利家碓日嶺より上杉景勝は坂本よりまは  
名胡桃を奪ひ取し猪俣は戦ひて城を捨逃落りまは真



田信之ノキキ後伊豆守城ノキキ入事を得しノキキ昌幸ノキキハ去ノキキ天正十三年ノキキ以来秀吉の恩顧を得しノキキ大谷吉隆ノキキより次男信仍ノキキを承り吉の許ノキキより人質ノキキを出しり其後石田兵を起さるノキキの時真田父子三人ハ奥州ノキキに打向ふ途中ノキキ石田が使来ノキキし秀頼公ノキキ此為ノキキに旗をおげし同心せしノキキれば信州ノキキは故主君の地甲斐ノキキを添ノキキくあらせん偽ノキキなるをノキキしりて起請文を送りノキキり昌幸素ノキキより徳川家ノキキは二心ノキキあまノキキばさノキキば引返ノキキさざノキキしノキキ信之ノキキ是ハ然ノキキるべし内府智勇勝ノキキまノキキる人ありノキキいノキキてうきノキキやノキキて討滅ノキキさノキキるべき也ノキキもあノキキざノキキるノキキなりノキキ徳ノキキまノキキるノキキ昌幸ノキキ聞入ノキキび又一説ノキキは本多ノキキと親ノキキしノキキと厚ノキキくノキキらノキキば石田ノキキはノキキみノキキがノキキ由ノキキを信之ノキキヤノキキせノキキるノキキ弟ノキキの信仍ノキキ女房ノキキ此ノキキのみノキキ引ノキキまノキキ父ノキキよりノキキり

やうノキキやノキキりノキキしノキキ又信之ノキキ西國ノキキに與ノキキせノキキれノキキるノキキは必軍敗ノキキまノキキるなり其時父ノキキと弟ノキキとの危難ノキキは逼ノキキらんノキキを助けノキキて家の亡ノキキぶるノキキ振ノキキよノキキせんノキキといノキキひノキキまノキキさノキキば信仍ノキキ西國の軍敗ノキキまノキキるノキキば父ノキキも又信仍ノキキも同ノキキく戦場の土ノキキとなノキキらんノキキは何ノキキとノキキしノキキて助けノキキさせノキキるノキキべき徳川家先年兵ノキキを知ノキキり上田を攻ノキキり時景勝ノキキ加勢ノキキひノキキり其報礼ノキキたノキキらノキキるノキキべき其比秀吉公ノキキ和平ノキキを取行ノキキひノキキるノキキ武名ノキキを世ノキキよあノキキげノキキりノキキば豊臣家の恩浅ノキキしノキキといノキキひノキキまノキキさノキキるノキキ唯疾石田ノキキは同ノキキ心ノキキをノキキ然ノキキるノキキべし凡家ノキキ此亡ノキキぶノキキべき時人の死ノキキてノキキべき時ノキキ至ノキキりノキキ潔ノキキく身ノキキを失ノキキひノキキるノキキて勇士の本意ノキキあノキキるノキキべし何条ノキキまノキキるノキキあノキキくノキキいノキキのち生ノキキる家の亡ノキキびノキキまノキキるノキキやノキキしノキキせんノキキと云ノキキるノキキやノキキしノキキと争ノキキひノキキまノキキさノキキば信之怒ノキキく汝が詞不禮ノキキなりノキキとて既ノキキに



切ぐ捨べく刀をしくバ信仍りやく只今爰みく首を刎ら  
まじふ事ハ許さまじよ信仍ハ豊臣家の為よ身を失ひやさん  
志たりのといへバ昌幸ややく兄弟の争各其理有太閤世を  
ませしきし後此事の起さるも必秀頼公の為よす忠よ  
あはれと信之ハおのへるあはれ信仍がゆを吾思ふおあはれバ  
こまてきたよ引返さるべし信之ハ是より心任せよとて別  
まじしといへり又一説昌幸云くるハ會津より宇都宮よむて  
七日路たのまじても日の岡北徑より三日の行程あり景勝と  
謀と合せ前後より攻よんは伊豆守俄よ裏切するを  
らバ徳川殿をきやましく討取べしといひたても信之内府  
ハ勇略百萬の人あはれといへり味方利有ん事存も是に

とて遂よ兵を引ひかく参りたまは 東照宮信之を召  
て安房守が片手を折つる心地するよ軍は勝よバ信州  
を賜よべき後の證ぞとて御刀此縁のちを断よ賜り  
くるといへり又真田兄弟の争此處ハ佐野北天妙といひ又  
犬伏といふ所ありともいへり

昌幸ハ引返し沼田の城あはれ信之が妻よ對面せんと言くる  
よ信之のゆに方咄もいへば既よ父子仇となりく引かまきといひ  
くバ父あはれおのへるも城よ入奉りてまのえんやさん事おひも  
おぼとく本丸の門を固めさせ自ら物具取ゆ女房た皆刀を  
側よまきしり厩よいも毛の馬あはれ厨の土間よはまげとて  
下知せしれくる昌幸やて吾過ちなり人よ能すれ日本一とせ



よ云る本多中務が女たりたるよ弓取の妻ハかくこころ有るは  
此婦人あゝんよハ真田が家危うくとといひざるごとく昌幸夫よ  
ア須河に至り高間越よかりと上田ふかへりたりと 山口徳院殿  
木曾より登らせり時御使を以て禍をもちひりててこそ  
あゝ 仰有る小昌幸つて秀頼の為よ城をちりぬ  
攻らるハ一矢仕んと答へるバ又御使のく石田小西も巴が  
威權を恣よせんが為よかゝる企よ及べと豊臣家の恩を蒙り  
人々皆背きたるを以て知るに降参あくるバ信之小腹切せ  
其後城を攻破るべと仰送らせられ小昌幸聞て太閤恩深  
き人々の背きんハ此人の心の同どらざる故なり既よ子也  
以信之父と相違ひるもあゝも返り召さるべし信之小腹切せ

まんとも親の子を愛するハ誰も同ド事よいども信之父と  
との小城あゝバ同ド枕よ討死さるべし信之を助くべき小あゝは  
こ答やせりバさゝバ攻よと陣をまゐらる其日ハ百姓の家小  
込入きりし小榊原康政真田今夜必夜討せよとて物見を  
出し篝火を透間なくきりせり果して信仍夜討せん  
と度しとるも康政の設ふよりと夜討ハせりス 斯  
く明もバ九月六日押寄る小浅見藤兵衛只一人墮際進み  
るも小打撃る鉄炮小朱小十二引の差物亦さるも其身もひ  
と折爰伏し味方の續くを待小栗治右衛門大音あゝ浅  
見功名せりとも深く深入りあゝなせりとも浅見を  
ア汝小先をせんやといひ門小付を小門を開きて出て出



浅見小栗得しりと鎧を合すも左右の守り屏より打出  
と銃炮雨の降がめし浅見が從者虎若といふころ八剛の者よ  
く刀を抜き鎧の穂先をくぐり入る敵の足を薙拂ふ浅見と  
痛手を負倒さしを虎若足を取ら引提は持歸せんとす  
浅見小栗をも助けよと云虎若呼て主人の先途の為小こそ来  
アと云他人を何ようせんと言いかい負く引退く浅見差物を  
たき落されしりと覺ゆ取て来らば生甲斐なくといふ虎  
若北より差物を落さば恥なり鎧を合せく落しころハ  
恥し非ばといひく念あく歸せり城兵山本清右衛門依田  
兵部堤の上よ上るをもろく寄る三十騎計馬を並べくおめい  
て駈よせひしりと馬よりりりり進む仍藤久矣山本依田

前小つと名乗るるを足もく均しく御子神典膳辻太郎分  
りりり合入乱まてたし御子神ハせとひあれた早とさよと  
鎧をかざり堤の中ひひりりと飛入朝倉藤十郎中山助六戸  
田半平鎮田市左津門太田甚四郎藤久左衛門まてひかり  
て鎧を合さ依田朱塗の物具あく戦ひるるが深手負て倒さ  
しを御子神辻依田を一刀づ切りりりり山本も鎧を折折  
痛手負あがり依田が屍を肩おかけく引退くあ寺追つむれ  
城兵又切りかきを中山鎧を合せ太田弓あてさ詰りつめ  
射しりりりバ門小追込しり

オホクノチ 太田後善大夫とりりり時士一人太田が許よ来て吾ハ真田  
ラウニシ 家の浪人あてり上田の軍此時相手よあてり者あり其時射







うづむと制しつるまは引返を戸田辻等の七人を上田の七本鎗  
と世小ヤスなり戸田ハ銀の觸體の物辻ハ白た四半よ辻と  
りふ字を墨少くまゝしり信仍箭文を射させ二人の武勇を称  
ぐり此中山ハまゝいめしる馭法の上手なりと云や

後よ依田を太刀付一三の論りり辻ハ依田朱塗の頬當せ  
しつり御子神ハ依田朱塗の曹是て頬當ハなつとよ牧  
野右馬允從者を馬工郎あし上田ふ遣し様をあして山  
本よあひ其時の事を向ふ山本が云此論有べき事なり誰  
人おもせよ頬當をかけどとよ人初太刀なり依田ハ頬當  
かけざりたせはつた場の鎗下あれば血よ流るるを朱ぬり  
の頬當とらるるあるべしと云しをさめてあり牧野小徳と

しつり御子神一の太刀よまきハまりりり

かゝり力攻よせしつるまは人死傷せん早く美濃よ赴うせつるまは  
と評定有森右近大夫忠政を上田のおととと  
△口徳院殿かこ

みをとせしつるまは榊原殿せし真田遙ふんく榊原が有根吾を侮  
まじり追うけくくひつるまは一軍せんよ云くつるまは真田が許し年老し

法師武者の謀ゆしつるまは有つるが康政やどの者いし其謀ある  
歴き古比兵法よ歸師勿逐とつるまはこれいしつるまは追ふり

東照宮榊原ハ必かりしつるまはまきめのこと仰らまじりが後小  
召く御尋りり榊原承り御大将ハ城よ遠き山よかりりしつるまは

申く臣ハ城下を真直よ殿仕りりとやせしつるまは東照宮必  
あうしんとあひしつるまは果しつるまはさびざりりつるまは仰らまじり石



田少軍やぶまりて真田父子を誅せしむるに及ばず信之此度父と引分  
ましく余れを父を助ん為るる多し大國を賜ひんとも何より仕  
らへあるに信州を以て二人の命ふかへ度音を中されりて  
信之井伊直政榊原康政に撥く父を助けたりゆへとや  
東照宮は召許容ありしと仰らまされば 台徳院殿より  
信之父を助んといふはこゝろりあやまらざるも安房守小幡  
きくましく関ヶ原の軍はたすむるに必安房守を誅せしむ  
て御ゆるさまの意なかりしは伊豆守乞を承り又兩人は就  
く仰の趣べき詞ありかゝりんと存父を誅しども用ひ  
さまバカ及びゆるは只志ん所の安房守を誅せしむる  
より先まづかきし伊豆守小幡腹を仰おさしめり御敵

の子なまじバたあふべきと世の人も存べし必父在世の中は伊豆  
守を誅せしめよと云も終らぬは康政心得る房州御赦免の  
事ハ康政がやうく事よくせんむりの義朝ハ大小異なれ  
豆州うるといひく其音をやせしむる 東照宮 台徳院殿も  
聞召入らましく真田父子ゆるさしめりといへり  
信之小信濃十二万石の地を賜はり昌幸信仍ハ御赦を蒙り城を  
出く紀州高野の麓九度山より引籠る信仍常は父と兵法を談し  
て天下の時勢を計りたり昌幸ハ六十七歳あり九度山に死す  
其後大坂に乱起りしは秀頼信仍を招きたり此比世の中  
さうじがかりなきは紀州ハ浅野長晟の領地あり橋本此  
百姓は真田大坂は初事ありしとあふと下知せしむるは







既<sup>ス</sup>東<sup>トウ</sup>西<sup>サイ</sup>の軍起<sup>オコ</sup>るふ及<sup>オヨ</sup>びく 東照宮<sup>トウシャウキウ</sup>いふ<sup>イ</sup>て  
信<sup>シ</sup>仍<sup>ニ</sup>を降<sup>カ</sup>参<sup>サン</sup>させ<sup>セ</sup>ば<sup>バ</sup>とて叔父<sup>シヤクフ</sup>隱岐<sup>インキ</sup>守<sup>シ</sup>信尹<sup>シノイン</sup>を以<sup>モ</sup>て此<sup>コノ</sup>旨<sup>メシ</sup>仰<sup>オホ</sup>ら<sup>セ</sup>  
信州<sup>シノシラ</sup>めく一萬石<sup>イツマンシヤク</sup>賜<sup>タマ</sup>はり<sup>リ</sup>ゆ<sup>ユ</sup>ひ<sup>ヒ</sup>なる<sup>ル</sup>なり<sup>リ</sup>信仍<sup>シノニ</sup>同<sup>ドウ</sup>心<sup>シン</sup>せ<sup>セ</sup>ば<sup>バ</sup>又<sup>マタ</sup>信  
州<sup>シノシラ</sup>一國<sup>イツクニク</sup>賜<sup>タマ</sup>る<sup>ル</sup>べし<sup>シ</sup>と仰<sup>オホ</sup>せ<sup>セ</sup>る<sup>ル</sup>なり<sup>リ</sup>信仍<sup>シノニ</sup>怒<sup>イカ</sup>る<sup>ル</sup>義<sup>ギ</sup>ハ人<sup>ヒト</sup>の道<sup>ミチ</sup>なり<sup>リ</sup>  
秀頼<sup>ヒテヨリ</sup>は二心<sup>ニシン</sup>あり<sup>リ</sup>事<sup>コト</sup>存<sup>ゾ</sup>もよ<sup>ヨ</sup>る<sup>ル</sup>べ<sup>シ</sup>重<sup>カ</sup>移<sup>カ</sup>る<sup>ル</sup>か<sup>カ</sup>る<sup>ル</sup>使<sup>ツカヒ</sup>をせ<sup>セ</sup>られ<sup>レ</sup>ば  
存<sup>ス</sup>る<sup>ル</sup>旨<sup>メシ</sup>あり<sup>リ</sup>と罵<sup>ノノ</sup>り<sup>リ</sup>信尹<sup>シノイン</sup>を追<sup>ヒ</sup>て<sup>テ</sup>去<sup>ク</sup>る<sup>ル</sup>

或<sup>シ</sup>説<sup>セ</sup>ふ信尹<sup>シノイン</sup>は向<sup>ム</sup>て天下<sup>テンカ</sup>を添<sup>ソ</sup>へ<sup>テ</sup>賜<sup>タマ</sup>ふ<sup>ル</sup>も秀頼<sup>ヒテヨリ</sup>不<sup>ソム</sup>背<sup>ソム</sup>  
き<sup>キ</sup>く不<sup>フ</sup>義<sup>ギ</sup>ハ仕<sup>シ</sup>て<sup>テ</sup>汗<sup>アセ</sup>の物<sup>モノ</sup>と<sup>ト</sup>て肌<sup>ハダ</sup>をぬ<sup>ぬ</sup>ぎ<sup>ギ</sup>小<sup>コ</sup>姓<sup>セイ</sup>はぬ<sup>ぬ</sup>ぐ<sup>グ</sup>を<sup>を</sup>せ  
くや<sup>ク</sup>ぐ<sup>グ</sup>て首<sup>クビ</sup>を関東<sup>クワントウ</sup>北<sup>キタ</sup>西<sup>セイ</sup>御所<sup>ゴシヨ</sup>の前<sup>マヘ</sup>は<sup>は</sup>ぬ<sup>ぬ</sup>べき<sup>キ</sup>と<sup>と</sup>てう<sup>う</sup>ち<sup>ウチ</sup>は<sup>は</sup>ひ  
み<sup>み</sup>く<sup>ク</sup>り<sup>リ</sup>と<sup>と</sup>なり<sup>リ</sup>の元<sup>ゲン</sup>複<sup>フク</sup>按<sup>アン</sup>ず<sup>ず</sup>る<sup>ル</sup>も昌幸<sup>マサユキ</sup>徳川<sup>トクヱン</sup>家<sup>ケ</sup>は<sup>は</sup>服<sup>フク</sup>従<sup>ジュウ</sup>し<sup>シ</sup>奉<sup>ホウ</sup>  
く<sup>ク</sup>後<sup>コノ</sup>関<sup>クワン</sup>ヶ原<sup>ケハラ</sup>の乱<sup>ラン</sup>は<sup>は</sup>及<sup>オヨ</sup>び<sup>ビ</sup>肯<sup>ケン</sup>た<sup>タ</sup>る<sup>ル</sup>事<sup>コト</sup>二<sup>ニ</sup>度<sup>ド</sup>は<sup>は</sup>及<sup>オヨ</sup>べ<sup>ベ</sup>り<sup>リ</sup>此<sup>コノ</sup>義<sup>ギ</sup>と

い<sup>い</sup>ふ<sup>フ</sup>と<sup>ト</sup>も<sup>モ</sup>や 東照宮<sup>トウシャウキウ</sup>寛<sup>カン</sup>仁<sup>ニ</sup>は<sup>は</sup>お<sup>お</sup>も<sup>も</sup>う<sup>う</sup>ま<sup>ま</sup>せ<sup>せ</sup>り<sup>リ</sup>あ<sup>あ</sup>ま<sup>ま</sup>再<sup>サイ</sup>  
犯<sup>ボウ</sup>の罪<sup>ツミ</sup>を宥<sup>ユ</sup>め<sup>め</sup>させ<sup>せ</sup>る<sup>ル</sup>なり<sup>リ</sup>信仍<sup>シノニ</sup>其<sup>ソノ</sup>寛<sup>カン</sup>仁<sup>ニ</sup>は<sup>は</sup>何<sup>ナニ</sup>を以<sup>モ</sup>て報<sup>ホウ</sup>い<sup>い</sup>ゆ<sup>ゆ</sup>  
心得<sup>ココロエ</sup>ら<sup>ら</sup>ま<sup>ま</sup>ら<sup>ら</sup>ば<sup>バ</sup>豊臣<sup>トヨトミ</sup>家<sup>ケ</sup>ハ<sup>ハ</sup>真田<sup>マキダ</sup>教<sup>ケウ</sup>世<sup>セ</sup>の君<sup>キミ</sup>ハ<sup>ハ</sup>非<sup>ヒ</sup>ぶ<sup>ブ</sup>て<sup>テ</sup>若<sup>ニシ</sup>君<sup>キミ</sup>ハ<sup>ハ</sup>不<sup>ソム</sup>背<sup>ソム</sup>の<sup>ノ</sup>  
義<sup>ギ</sup>を論<sup>ロン</sup>せ<sup>せ</sup>ば<sup>バ</sup>武田<sup>タケダ</sup>家<sup>ケ</sup>亡<sup>ホロ</sup>び<sup>ビ</sup>く<sup>ク</sup>後<sup>コノ</sup>世<sup>セ</sup>を<sup>を</sup>す<sup>す</sup>て<sup>テ</sup>山<sup>ヤマ</sup>中<sup>ナカ</sup>は<sup>は</sup>か<sup>か</sup>れ<sup>れ</sup>ば<sup>バ</sup>ハ  
い<sup>い</sup>ふ<sup>フ</sup>と<sup>ト</sup>有<sup>ア</sup>る<sup>ル</sup>べき<sup>キ</sup>真田<sup>マキダ</sup>が論<sup>ロン</sup>ず<sup>ず</sup>る<sup>ル</sup>処<sup>トコロ</sup>の義<sup>ギ</sup>道<sup>ミチ</sup>は<sup>は</sup>叶<sup>カナ</sup>へ<sup>へ</sup>ると<sup>と</sup>ハ<sup>ハ</sup>い<sup>い</sup>ふ<sup>フ</sup>べ<sup>ベ</sup>り<sup>リ</sup>  
ら<sup>ら</sup>ば<sup>バ</sup>世<sup>セ</sup>の人<sup>ヒト</sup>真田<sup>マキダ</sup>を以<sup>モ</sup>て<sup>テ</sup>賞<sup>シヤウ</sup>祿<sup>ロク</sup>せ<sup>せ</sup>る<sup>ル</sup>事<sup>コト</sup>甚<sup>ハナ</sup>し<sup>シ</sup>故<sup>ユ</sup>に<sup>ニ</sup>愚<sup>グ</sup>論<sup>ロン</sup>を<sup>を</sup>述<sup>シ</sup>  
る<sup>ル</sup>ふ<sup>フ</sup>及<sup>オヨ</sup>べ<sup>ベ</sup>り<sup>リ</sup>

大坂<sup>オオサカ</sup>その陣<sup>チン</sup>ハ<sup>ハ</sup>出<sup>デ</sup>丸<sup>マル</sup>は<sup>は</sup>有<sup>ア</sup>る<sup>ル</sup>防<sup>ボウ</sup>ぎ<sup>ギ</sup>は<sup>は</sup>る<sup>ル</sup>が<sup>が</sup>大<sup>オホ</sup>敵<sup>テキ</sup>の責<sup>セメ</sup>ハ<sup>ハ</sup>耐<sup>ナ</sup>守<sup>シ</sup>固<sup>コ</sup>り<sup>リ</sup>  
り<sup>リ</sup>和<sup>ワ</sup>平<sup>ヘイ</sup>は<sup>は</sup>及<sup>オヨ</sup>び<sup>ビ</sup>信仍<sup>シノニ</sup>越<sup>エ</sup>前<sup>ゼン</sup>忠<sup>チュウ</sup>直<sup>チキ</sup>は<sup>は</sup>仕<sup>シ</sup>へ<sup>へ</sup>る<sup>ル</sup>原<sup>ハラ</sup>隼<sup>シン</sup>人<sup>ヒト</sup>貞<sup>セイ</sup>胤<sup>イン</sup>ハ<sup>ハ</sup>ふ<sup>ふ</sup>じ<sup>じ</sup>  
よ<sup>よ</sup>と<sup>と</sup>有<sup>ア</sup>る<sup>ル</sup>招<sup>マネ</sup>き<sup>き</sup>め<sup>め</sup>て<sup>テ</sup>あ<sup>あ</sup>り<sup>リ</sup>原<sup>ハラ</sup>ハ<sup>ハ</sup>武<sup>ブ</sup>田<sup>テン</sup>の士<sup>シ</sup>也<sup>ナリ</sup>酒<sup>シウ</sup>盃<sup>サイ</sup>教<sup>ケウ</sup>献<sup>ケン</sup>の後<sup>ノチ</sup>信仍<sup>シノニ</sup>  
鼓<sup>ツツミ</sup>を<sup>を</sup>う<sup>う</sup>ち<sup>ウチ</sup>子<sup>コ</sup>の大<sup>オホ</sup>め<sup>め</sup>は<sup>は</sup>舞<sup>マヒ</sup>せ<sup>せ</sup>く<sup>ク</sup>與<sup>ヨ</sup>り<sup>リ</sup>る<sup>ル</sup>が<sup>が</sup>信仍<sup>シノニ</sup>云<sup>クニ</sup>々<sup>々</sup>ハ<sup>ハ</sup>五<sup>ゴ</sup>口<sup>コウ</sup>必<sup>ヒツ</sup>



討死せんえのどむ此外またあぐりて再會する事よされと終つ  
軍小及ぶべし落ぶまゝく九度山よかくれ居しが一方の大將とあ  
アとてん豊後家の恩きりて人やうなりしはまふんも鹿の角比  
立物の曾ハ真田家よ付へし物として父安房守譲り与へてん  
重祿その軍よハ必きんずる物なきは見置てきまひりしへ又命ハ  
をうらみども大みかぢのひもたなく空しく戦場の土よあ  
んハ不便よんと後うきまハ貞胤も涙を流し軍よ臨む者誰う  
生く帰らんとあめまさと各へし信仍白河原毛ある馬よ六連  
錢を金りてまうし鞍ねせ庭めく兼まハ原よ見せて城  
ハ壊しまたま天王寺口よかけぬ馳めり下知してあ程  
軍よとやと存じれば此馬のかもゆくと語り又酌酔く別

り果して和平敗まうる元和元年五月大坂にて軍評定あ  
ア後藤ハ大和口の先陣めく平野小陣しぬ五月六日夜信仍毛  
利豊前守勝永と二人打連く後藤が陣よ行明るバ國分の山  
を踰三万九軍兵を一陣めく関東の旗本よ一文字よかけ入  
軍神も照覧りし兩御所の首をとるう二人此首を實檢小そま  
あるう二の中よとて最期の盃せり後藤ハ六日の夜半ハ  
道明寺口めく討死しりて毛利ハ藤井寺よ陣を進りしめとや  
後藤が軍やぶるも関東の軍兵二三十万もあらん洪水の溢る来  
るがめし真田を待どもいまぞ来らば真田ハ兄の伊豆守と回  
心し裏切するも人々罵りしよ住吉海道より赤旗  
行立馬煙ふり立く来るをみまば金の蠅より此馬印よと



かのまは毛利が陣もしさみあへり信仍譽田の方ふすめばさてハ  
いよ二心よと人々あやしむ知は信仍堤上より鉄炮進  
めく伊達政宗の先陣片倉小十郎又向て討くかゝる信仍真先小  
進てきりうひしが片倉が陣敗れ逃るを追て敵あまう討取り  
片倉金の鐘は差物あく魔をとりりめきて政宗の旗本は騎  
馬の鉄炮もすくみある奥州ハゆゆる馬多き所あるはよい馬を  
擇びく若き士よき馬上より鉄炮をつるべ立させ敵ひるむを  
馬の首を揃へく忽棄破りかげぞく追崩を軍畧なりあぶ  
其間相去る事遠くしは信仍いざ疲まころふ息をばげ  
曹を托し下知しきまばこれ曹をぬいぐ休居しり敵や近付  
しは信仍さうば曹を忘るるつらあどこそあれ曹の緒をうめ

鎗の穂先をそろへく敵は向ふ政宗の鉄炮箕多なり小ぬそ  
かり来り雨の降るく打けしり信仍真丸は成るるもの  
まゝ一足も引なぬのたし下知しひりくと跪く声ふ念仏  
をととあへ力を合せくころころ信仍大音あけ一寸も引を爰  
小死ゆやと下知して鎗を取てかきま士卒一同は立上りおめい  
て鎗を打入るくは政宗の軍兵大に破れ一支もなく山崩しり  
此を世は真田が天王寺口に軍とて大軍の騎馬鉄炮お打絶る  
有様をつらく称しり信仍士卒を立固めまづくと毛利が  
陣よ来る大々今年十六歳組討し取する首を鞍の四方手小  
付手負しるが流る血をもぬぐく馳来るを毛利見てあられ  
父の子なりと感どかり信仍毛利も涙を落し時列違く



後藤が討死せしを謀空しく成ぬるも豊臣家の運尽ぬる所  
なりといふ毛利も大敵に打勝まり武勇に有根右の名将小  
もすさううとてとぞ云々かゝる所は秀頼の黄母衣に使者来  
てて城中小引のりりりと下知せしむる小信仍ハ橙赤旗お  
し立今一軍せんと曹の緒を志め速く勇氣殊にいふ  
見えたりとて水野日向守勝成此をらんといふ軍せんとて  
おすめらるる同心の多かり越後少将忠輝とて陣を進  
められしが此も真田が陣よかると曹を急ぐ政宗の士大将  
片倉小十郎忠輝の前より来り日暮に近く軍危うるといふ  
己をの士どもいふかりとて討とて弱敵をあまはれといふ  
片倉それハひが事とて日本國を敵めとて軍はる大坂の老女

を弱敵といふなきや片倉が組の士三十人れ中二十九人ハ討死  
しとて是れよとてつばまで血は深き刀のまがうとて  
見せてより越後の士大将花井主水もいふとて軍奉行王  
虫對馬は問ふ玉虫敵ハ二の所此勝を心げんかると軍小利  
はまといひとていふ

忠輝大坂をつとむきやと評定決せし後藤瀨左大夫足輕を  
うけらひといひとていふ軍をさせしとていふ  
玉虫僅ある足輕を以ていふとて敵の大軍をくひといふ  
といふ後藤瀨左大夫の事ハヤとて六尺の大男といふ  
らふ踏ぬきすれば行歩ひまるといふ人数少といふ  
つけらぬ事やあるといふ玉虫地の利をぬ所をて日も



しりあきざりの合戦ハ危きおとすと押とむ小能  
登守ハ判官度三草山をこえての合戦ハ志ぬ國の夜軍  
たのむとやといふ皆川老南小能能忠と花井主水條瀬元大  
夫ハ駈らんとつども玉虫對馬林平之丞ハおけ田く論決せ  
ざりしゆ小大坂方志ざりしと引取しより

真田が陣はハ扇をあびく招き何とて軍しゆいぬぞや  
あふ呼りたりとれからざりしバ信仍志づらん兵ををさ  
め関東武者百萬もあれをのこハ一人もなると大音よ罵りし  
引取しゆバ東照宮玉虫よ林道春よ且六子ガ六國の風を説く  
る章を讀しめらま玉虫を逐出ささるり此玉虫ハ甲斐の武  
田家ゆ物しあま軍奉行しりしゆいなる故なる人もあれ

しりあきあくる七日の軍は信仍兵を出せし秀頼の此馬をすく  
めんし先子の大女を城よかへり大女今年十六よ及ぶま  
片時もかゝ人を離さるるにけき今討死のきハ逃しりし人の  
いも人も口惜くは去年母上よこり奉りし後文のせよりおな  
らへく相見んハ福がはりしゆも合戦の場ゆ必父う人と同  
枕よ討死せよ苟も名こそをりしと誠めらましといひくまバ  
信仍城中へ歸しといふを秀頼公の侍らあなり父子ともこそ  
のぐるべきやるがて冥途よなきを志むりの別まを惜むこそ  
口惜くましく城よあましと取つし手をし放せば大  
女名残をしけし父をるるさう冥途あてこそしゆ信仍  
大女をえおろし落る涙をおきし昨日誓田し痛を負し



よらるる体のえんえんハよも最後ハ人小笑ハ心安しといひ  
さるしつやかくく大坂の軍敗まり六信仍討死しけるを首をば  
越前忠直の士西尾仁左衛門取らりし小誰ともあはれ真田信尹  
馬に乗て打通り此を見く其曹ハ見知しとぞ真田尤楽門伏さ  
ぶし口をひらくはよ向齒二枚胸に有べきといひし小信尹が  
詞のごううさそそた馬伏とハさうくはれ彼曹ハ原小物語て  
名せしるなり弓箭とる身ハおひひの詞かゆく云おくべき事  
ふこそといひあへり大坂ハ城中よ入秀頼小従ひく若田曲輪の  
矢倉ふこもりく父の事を尋ひしるふ討死せしと聞てそれ  
より物もいさば母れかきふ賜りりくる水晶の珠数を首小か  
け秀頼の自害を待居しは速水甲斐守大坂小向ひて組討の

武勇きくくたふまひく痛手負まりしとゆ也和平して  
君も賊をばせむつべし真田河内守信吉の方へ人をそくく  
送るべしといどもちんとも動くは寄手矢倉を取巻し時  
速水戸口立出く大坂有根をかりり武勇の血脉おそ  
ろしれたるなりと云しはあり終小大坂も矢倉の中死  
て父子同く豊長家の為小亡びしり

○大坂夏陳よ真田信仍と伊達家と軍とる時伊達家の騎馬  
鉄炮をうち立しれバ玉の飛くと霰の降がめく信仍が軍  
兵ども折しきく鎗を敵の方へさし向し居し小西村  
孫之進とりあ者うし味方死二つを重移し肩とて  
居し小玉一つあき二つの死をうち通し孫之進が肩小傷た



きまてはもうにまたり鎗を握りしる左のこがし乃大指こ  
そをやくて氣味悪く覺え跡指四本少く大指をさざり  
込くくくきり全身の危きうらひまきまき大指の先斯此  
しつたハ怯む故あんとせひく左右をささふ皆さうしり  
又かへは並び折ふきしる者よ玉の中音甚強くしり  
我身の中アアとわびえしと後よ人よかきりきり此  
時孫之進伊達家の秋部甚平といふ者を討取きても其姓  
名をさくすと落城れ後孫之進いままごいづまの家も仕へ  
て江戸はむらむきあさりしが相知も老の方へゆたけり  
時客来まり主人西村が事をかきり大坂少く事ふ  
あさりおなりといふかの客ハ伊達家の士海道林左衛門と

いふ者あるが誰の陣よりかきりしと向ふ西村真田左衛門  
が許は有りと答ふ客の云はてハ五月六日の戦あてれ事ある  
べし具は兼アんとやと問ふ西村ゆきし事ある事ふても  
福も尋ふ付くべし伊達家と始の一戦終り後此軍  
殊の外とげし伊達家の陣を七八町計も有らん追し  
てふ三十人計あるかへし折あきしり某も三人鎗を入  
りひき某が鎗の相手此間はおし隔りかくかけ入人を初鎗  
よららみの外を突損ト二れ鎗は草摺の間を突くを  
し首をさうんとせしに歴々の人やくやひひん従者と覺  
き老二三十人も取巻しりふく幾刀もあききり  
皆具足の上あきしを負ひしり鎗あきし腰骨をばうれ



倒タビし絶入タスリされありハわがるは後ノチは兼カミアハバ真田サタマが惣ソウ  
軍カシぶつと押オシかりぬるは首シビをとらるる中ナカ彼突伏カニキキ  
しる鎗アヘテの相手サマハ定めくたすけのうまひもあべいと存ゾクと  
其後スゴ少ホトく入ゴ心地コチつまるは馬ウマとり弥右ヤサと申カハ老カハこれわがの  
手テゆる弱ヨクる事コトありと云ヒく跡アトの方カタへ歸カハる音ネかすに  
耳ミミ入ミぬ見捨ミステく逃ゲまらうと云ヒひふ又マタ来キく腰コシのふぬぐひ  
を水ミヅよひひり持来ヒキタて口クチふちぢり入レりゆゑ気キ付ツキくを  
弥右ヤサの肩カタふかけ城シロ中ナカへ歸ヨクて翌日ヨクジツも其疵キズ故ユエ働ハタラく事コトあり  
戦場セシヤウへ出デけしと申カハる存命ゾクメイといへバ彼客キヤク聞キく事コトあり  
初ハジメの鎗カシを合カせんハ士大将アキバキヤウ秋部アキベ刑部ケイブと申カハ者モノあり其間シマふかけ  
入レるハ刑部ケイブが于シ甚平シヘイとりふ者モノあり御物ミモノのしりぞき疑ウタガハシ

かのく甚平シヘイをば陣屋ジンヤへ連歸ツカアと申カハども死シぬ察サツせられ  
トホリイタシ  
通ト一陣イチジンの大將ダイシャウ申カハる其日シヨウニ武功ブコウの證人シヨウジンハ我ワレホ立タべきあて  
其シをシまゐシせんシと右ミダれ次第シダイをカキ花カキ押カキをカハへ  
西村ニシムラはあてさて譽田コニタ以来イライの糸會サニクワイ珍メツらシ縁エニなりとて互タビ  
よ抱ダくシて別ワカまらう西村ニシムラ後ノチは池田イケダの御家ミイヘ芳烈ハヤシツ公キミ政マサ

朝ツク臣シ仕シへシ

○佃次郎ツクダ兵衛ヘイ十成カハナリハ加藤カトウ嘉明ヨシアキラの先手サキテの士大将シダイなりから  
一ヒト艘フネの船軍フネイふ十成カハナリ敵船テキセンへ乗移ノリワツる時敵劍ケンめく口中クウチウへ突入ツキイ  
舟フネも少コくもひるまはば飛込トビコミるを棒ボウめく曹サウの上ウヘを強ツヨク  
く打ウち海中カイナウへ落入オチり水ミヅも長ナガくれば泳オヨぎあぐるを  
從者ヅクシヤ熊谷クマガヘ覺兵衛カクヘイ薙刀ナギタをさし出デけ取付トリツキ直ススは敵船テキセンへ乗入ノリイ







宜しく百姓とも困り河野一族の人々國に入る事  
百姓の安堵なりと悦びし中より城中にゆるりの老あて  
具小乗りハ嘉明関東へ出陣軍兵を拂て連らまらぬ  
今残る者ども多うび大う老衰病者も一人も  
軍さむき老あー佃十成も大病あり鉛菜も乏く落支度の  
外更小なりとや逃去たんと口ふ云せしまば安藝の士  
大将さも有べしとて跡もさうりて彼百姓一人立歸り其  
有松を告知せられれば今夜風雨の紛まは一夜討ま  
しとて嘉明の貯へたれし白布を朧肩衣に裁縫て配り  
りて十成ハ背小松の字を墨あくるまらとてさうりし合詞  
を定め首ハと取べうび貝の音をさバ勝負を止し引とれと

約束を定め慶長五年五月十八日戌の刻に打立たり忍の老  
歸りて今夜ハ村上が陣所を集りて酒盛の半なり響山の  
濱も不張番の足輕松前れおさへ置きと告る十成打  
破りて通らんハ安らまらども途中に滞りて三津浦へお  
たば謀いさづま成べしとて道を替江戸山を越る子の刺  
討に三津浦にわらせ所々の民家火をかけく切て入し  
らば大小さあをく物音も聞らぬ十成薙刀を提真先小  
進りて掃部敵寄りしとて何程の事りまきとて  
かけ物々を夜討の大將佃次郎兵衛なりと名あて掃部を  
つき伏せ敵あまの切をひ見を吹立く軍兵をさしひさ  
づくと引えり掃部を始み内匠兵衛も討まらば



引退て久米の郷如来寺小楢クメガサヨライジの盟ヨウ十九日十成又カズナリか  
くまの如来寺ヨライジも支へく道後山ダツゴより引退く十成も深手教フカデ  
多負く日ハ暮ぬ松前マツサキより引退く道後山の安藝の人アキ追オシ  
郷の百姓を相後へ刈田焼アヒシガカリヤキむカサ松前此城を攻んと  
すカトウとゆゑなナくナバ九月廿三日加藤内記道後村へ押寄せて  
相戦ふ十成ハ久米の戦ふアヒシカもテおオくカゆカづカりカらカやカ重カサねカて安ア  
藝キの加勢来らバ始終いくセでテ勝カツべキまカ今キフ急オツハラ小追拂オツハラは  
後日ゴニチ此事オホツカ覚束ナたり手痕テノヅを痛イダめて城中小死シヤウシんニより敵ニ  
向カひ快マヨく討死せんニとカ城下シヤウカの町人近郷の百姓二百人計  
あつた具足グソクをキ送サイシせ妻子シキを質シキよカりカくカ帟旗カミバタを指サせ十成  
引具ヒキくカ道後村ダツゴより向カへカ味方ミカタ是ニよカ力を得エ兵戸平シンドヒラフカ正

よ従シひカくカ一揆イツキちりカくカふカありカりカまカ終ツふカ風早カサハヤの浦ウラより  
船フネに乗ノリ藝州ゲイより引退シたり関ヶ原セシの後嘉明松前ニツサキより語りく  
戦功セシコウを撰エスむカに夜討ヨシチは首クビとカざカりカバ十成村上ムラカミを討取  
くカハ明アキラらカまカりカ其功イコウをいカはカ生捕イケの者モノ小寺コジぶカぬカふカ村  
上カミ陣チンへ先サキぞカりカ切込キコシぶカるカ人の向ニコたカ肩衣カダギヌれカ肯カふカ松マツの字ジを大  
まカりカまカりカるカ薙ナギ刀タタぬカ村上ムラカミを突伏ツキフセをカ間近マヅカくカ引カりカと  
いカはカまカりカるカ嘉明十成カズナリが功イコウよりカ松前マツサキをカらカまカりカるカ殊コトは安ア  
藝キの物主モノヌシ三人サニニを討オホ志カセ大洲オホスの加勢カセを辞ジせカ事コト勇ユウといカひ忠チウ  
といカひカまカりカるカりカとカ太閤タイカウより賜タマひカるカ物具モノカは感状カンジヤウを  
添ソヘく浮穴郡ウケナノ久万山クマンの庄シヤウ六千石ムササキを與アタへカらカまカりカるカ長十八  
年嘉明温泉郡勝山ヨシエキララシセンの城キヌを築キヌき松山マツヤマと名付ナツ松山マツヤマの北キタ別



小一郭をかまへん五ツ矢倉をあらはれし十成を置まぬ元和元年  
大坂の軍少と十成嘉明の嫡男式部少輔明成に従ひて淀  
川を渡り城兵を討取りと同年十成関東よ召まじ葵の御紋  
此時服を下されぬ寛永四年嘉明奥州會津よ移りて本成  
よ二万石をもらへらまじり寛永十一年十成病おのり子成  
いもを集め吾若くしより戰場小物事度とめて疵  
を蒙る事十三ヶ所就中豫州久米の合戦よ鉄炮頭の右小  
あさりく其鉛皮の中よあり然も運盡されば死  
せぬくかく老年よ及ん病の為よ死せんと覚ゆるあり  
是を以て思ふふ弓箭取者ハ少くもまじり志  
あさるべしはかきふ是を残さんく刺刀をとりて皮を

破り銘九をとりて前よ三月二月八十二歳まで端座  
終りしと我

関ヶ原の亂治りて後大久保治右衛門忠佐よ二万石賜ひて  
三枚橋城主よりお渡邊忠右衛門御近習の人お向ひ治  
右衛門を武功の者と思召さるる此忠右衛門よ逃りて  
申さるるを関り召治右衛門を召まじ先年三河より一向宗一揆乃  
時忠右衛門兄弟弓を持其槍あまじ鉄炮を持する者七人ハ  
汝一人立向ひく相手がけの勝負たのバもなまの役を知も  
べたよ多勢の飛道具ふ吾一人かくりて大死さるるあは  
と大喜小切をうけく引退きしと聞しり然もお渡邊めが  
く無理をつふ男少くもあはすて金よあは必此後



見<sup>キカ</sup>ぬ休<sup>テイ</sup>みく阿<sup>ア</sup>まきとそ仰<sup>オウ</sup>めたり

常山紀談卷之十七終

常山紀談卷之十七終



